

先人からの伝承

警防の技150選

湖南広域消防局

先人からの伝承 ～ 警防の技 150 選

はじめに

当消防局の災害現場活動は、警防活動規程に基づき事前に策定された活動マニュアルや組織体制のもとで、過去の経験に基づき積み上げられたノウハウなど、確立された一定のルールに則って行われており、消火活動における部隊連携活動での「4－3フォーメーション」などは真にその一例であります。

一方で、要綱やマニュアル等の決まり事を示しきれずに語り継がれてきた、いわゆる”暗黙の確認事項”とも言うべき「技」や考え方が存在しています。

これらは、現場における我々の先輩諸氏が多くの経験の中から、その達成感や痛恨の念を経験する中で養われ、日々の業務を通して無形の財産として今日まで受け継がれてきた価値ある経験則でもあります。

しかし、これらの経験則は今に直面する職員気質の変化、あるいは大量退職時代の到来の中で、先輩から後輩に必ずしもスムーズに伝わっていくかどうか危惧されるところであります。

然るに、昭和45年の湖南消防組合の発足から、湖南広域消防局へと組織再編される40年の伝統と歴史の中で、価値ある経験則を将来に向けて『湖南消防の生きた財産』として引き継いで行くことを目的に、また、平成21年4月からの機動指揮支援隊の運用を機に、ベテランと若い力が融合し、更なる現場活動の強化に繋がるよう、ここに経験則をとりまとめたものです。

平成21年4月

湖 南 広 域 消 防 局
局 長 中 野 宗 城

目次

災害対応 ・ ・ 隊長		
1	キャビン内活動	P1
2	現場での呼びかけは拡声器で何回でも！	1
3	ライトの有効活用 ・ ・ 屋内進入	2
4	部下の能力を知る	2
5	「まさか」と「もしや」	2
6	我々は多くの目で見られている	2
7	意志の伝達 ・ ・ 指示、命令（相手に伝わり、理解して初めて伝達）	3
8	下命・意志伝達が1番 速報（無線）は2番	3
9	暗黙の了解は「了解」にあらず	3
10	現場での即断がベスト判断	4
11	指示・伝達事項 必ず両側通行	4
12	無線は一息ついて ゆっくりと	4
13	隊員が無事帰隊してこそ活動完了	5
14	火災時の被災家族の居場所	5
15	現場における時間確認とメモの重要性	5
16	消防用語の使い分け	5
災害対応 ・ ・ 隊員		
17	かけてあるはしごは取るな 単にあるから使うではダメ	6
18	人命検索は全て開けて確認を・・	6
19	玄関だけが入り口と思うな	7
20	圧力が上がらない原因 ・ ・ ホースラインにも	7
21	ガラス窓の破壊 次に開放・取り外し	7
22	瓦屋根での注意点	8
23	足元、頭上 両方に要注意	8
24	竹藪の火災での注意	9
25	現場広報は市民にアピールする好機	9
26	感電に要注意	9
27	分岐管使用は、状況により	10
災害対応 ・ ・ 機関員		
28	危険と思えば 自分で確認せよ	11
29	サイレン、相手には聞こえていないと思え	11
30	緊急走行の消防車	11
31	焦る心 ・ ・ 常に安全確認	12
32	水利部署しない消防車の配慮	12
33	吸管投入は完全に	12
34	車両部署位置の配慮	13
35	河川への水利部署	13
36	シートで防げ 土砂の流入	13
37	新しいホースはポンプ側で使え	14
38	エンジン始動は運転席で	P14
39	吸管の長さや吸水可能落差について	14
40	歯止めの跳ね飛ばし防止	15
41	公園内の防火水槽	15
42	ディーゼル車の減速の仕方	15
43	帰隊するまで気を抜くな	16
44	防火水槽に部署、必ず導水管の有無確認を	16
45	機関員 必ず走行経路の確認を	16
46	停止車両に要注意	17
47	センターキープ、車間は十分！	17
48	ドレンバルブの開閉は優しく指先で確実に	17
49	消防車の凍結防止は重要	18
50	先着タンク車のタンク水は何時も満タン	18
51	水量計の水抜き状態は要注意	18
52	ホースの外れに要注意	19
53	車両誘導は補足的？	19
54	踏切を行くか、迂回するか・・	19
55	金魚のフン走行	20
災害対応 ・ ・ 共通		
56	消防の仲間とは・・	21
57	消防の仕事を立派にやり遂げて、卒業された先輩の共通項	21
58	要救助者 ・ ・ 要救ではない	21
59	プロの消防として	22
60	よく無線で聞く、「相懸かり」とは・・	22
61	安全管理意識	22
62	災害対応は「119番通報」から始まる	23
63	質の高い訓練	23
64	災害は、忘れるからやってくる	23
65	NBCや警戒区域でのゾーニング	23
66	目標は、完全なる社会復帰	24
67	河川で水流が白濁している箇所は浮力がない	24
68	道路冠水による車両水没 ・ ・ ドアは開かない	24
69	「もしや」に備える	25
70	思い込み、聞き間違いは失敗の始まり	25
71	火災現場での近隣者に要注意	25
72	「みんな逃げた」は、我が家だけ	26
73	活動検証はホットなうちに	26
74	AVMは使うもの ・ ・ 過信注意	26
75	車庫はきれいに	27
76	屋内進入は退路を確保して	27

77	自火報の発報 あなどるな	P27	117	見取り訓練	P43
78	^{モクニ} 木2建物 屋内進入	28	118	指令書の取り扱い	43
79	資機材は出来るだけ前へ前へ・・・	28	119	古い建物炎に注意！ 新建材は炎に惑わされるな	44
80	現場では 丁寧な言葉を心掛けよ・・・	28	120	現地調整所の立ち上げは素早く	44
81	小網の用途 使い方色々	29	121	隊長の指揮が全てではない	45
82	一度緩んだ二重巻ホース	29	122	とび口は、足場を調べる命綱	45
83	メモは意識して取れ・・・次第に習慣となる	30	123	慣れたら基本に戻れ！	45
84	相手は被災者・・・相手の身になった聞き方を	30	124	車両ドア 風には注意を	45
85	出動時も3点支持	31	125	携帯無線機は、防水でない	46
86	昼間も携行 照明器具	31	126	訓練を本番に、本番を訓練に！	46
87	空家にも人がいると疑え	31	127	現場は「理屈」でなく「経験」が物を言う！	46
88	ガス漏れ現場 微小火源に注意	31	災害対応・・・その他		
89	絶対に踏むな ホース	32	128	ロープとザイル	47
90	壁の間まで確認・・・風呂の空焚き	32	129	クリティカル イレブシ ミニッツ(きわどい11分)	47
91	モルタルは ヒビと膨らみに要注意	32	130	トイレからの出動は！	47
92	『愛称』『笑顔』 災害現場では控えよ	33	131	行きと帰りは違う道	48
93	はしごで渡れ・・・過重分散	33	132	防水シートの四つ折り 一人操作法	48
94	あらゆる所に危険が潜む	34	133	入浴中での出動指令	49
95	慌てると急ぐは違う	34	134	ステップに物を置くな	49
96	五感のフル活用	34	135	電池は消耗品	50
97	『あいまい』を残すな	35	136	夏の現場対策 水分補給	50
98	ロープは踏むな！	35	137	意識づけ 1当務 1訓練	50
99	あらゆる専門家の力を借りて・・・	35	138	事前準備で全てが決まる	50
100	防火衣完全着装から始まる 安全管理	36	139	現地踏査 地水利調査に勝るものなし	51
101	柔軟対応・・・基本があつてこそ	36	140	担当業務は内輪の話	51
102	うかつに歩くな、建物内部	36	141	交通安全五訓 暗唱してこそ 安全訓	52
103	身の安定化・・・高所注意	37	142	日々の雑談の中にこそ名言あり	52
104	先手作戦 次を読め	37	143	服装の乱れは 心の乱れ	53
105	二重巻きホース 一人操作法	38	144	勝手な思い込みで失敗する	53
106	隊単位は活動の原則	38	145	仮眠時・・・	54
107	再装備まで気を抜くな	39	146	着替えは2着以上持て	54
108	決断は迅速に・・・	39	147	個人の常備薬を持つ	54
109	災害現場は他人の家	39	148	緊急消防援助隊 個人装備はOKか・・・	54
110	穴はのぞくな	40	149	地震が起きれば車庫から逃げろ	55
111	屋根からの放水 ホースラインは棟越しに大きく取れ！	40	150	なぜ火事場のバカ力？	55
112	車両メンテ 目的は清掃と器具点検	41			
113	身のこなし 基本姿勢から	41			
114	訓練 目的意識を強く持て	41			
115	1に确实 次ぎに迅速を	42			
116	見かけでは分からない軟弱地	42			

災害対応 … 隊長

キャビン内活動

出足のつまづきは、後々に響くものである。

自分が地水利に不安な地域に出動するのは、少なからずとも不安なものである。そんなとき、出動場所に詳しい者が経路などについて一声掛けると、隊全体が落ち着けるものである。

また、その一声が次の検討課題を呼び起こし、隊の活動方針を作りあげることがある。

隊長は、そこからベストを判断したらよい。皆が遠慮しないで「**知っていることは声にして出せ**」が大切であり、普段からのコミュニケーションがよりよいキャビン内活動を生み出すものである。

命令や指示はゆっくりと分かり易く言う事で、自分の気持ちも落ち着き、ゆとりが生じることにより有効な指揮が行える。

現場での呼びかけは拡声器で何回でも！

混乱している災害現場の群衆には関係者や、災害事情に詳しい者や目撃者など、重要情報を持っている人がいることがある。

こうした人は、自ら名乗り出ることは少ないため、消防側から積極的に探し出す必要がある。

呼びかけは、具体的に行い、**拡声器やメガホンを活用して繰り返し行う**必要がある。

『関係者』という呼びかけは、抽象的で具体性がないため誰を呼ばれているか分からない。表札や近所の人から情報を得て・・・

(例： ○○さんの居場所をご存知の方おられますか？)



ライトの有効活用・・屋内進入

火災現場で屋内進入した隊員が携行するライトを、互いの意志疎通の方法として活用すると効果的である。

進入隊員に、自らの居場所や状態をライトを使って信号を送る。

あらかじめ、隊で合図を決めておくと便利である。ただし、簡単なものを。

部下の能力を知る

自分自身のことを知っておくことは当然のことで、部下の能力を知らずして、指揮をしてはいけない。現場における部下能力を知るためには、訓練以外にない。

「訓練したことしかできない」「訓練したこともできない」「訓練していないことは絶対にできない」

日頃の何気ないコミュニケーションが大切である。

「まさか」と「もしや」

災害現場では、指揮者だけでなく、だれしものが判断に迷うことがある。そんなときには、**「まさか」と「もしや」を常に考える。**

確認できなければ、一旦止める勇気が大切である。相手は上司であり、部下仲間でもありうる。

けがをしない、させないことが、最大の功名である。

我々は多くの目で見られている

災害現場だけではなく、日常から常に**我々は多くの目で見られている。**

消防がこんな事を言っていた(トラブルの元である)マスコミ、市民（窓口の一本化と、余計なことは、現場では絶対に言ってはならない）

訓練では、私語をしない訓練も取り入れよ。

意志の伝達・・指示、命令(相手に伝わり、理解して初めて伝達)

現場独特の雰囲気の中で、隊員相互間の意志伝達や命令は活動の展開を図って行く上でとても重要なことである。

指揮者が命令し、**確実に伝わってこそ意志の伝達**である。時には、活動を中止してでも隊員は命令に聞き入ることが重要である。

確実な伝達がなければ、単に雑音でしかなく、活動障害になるばかりである。

また、隊員相互のコミュニケーションは、具体的に言葉を発することが極めて大切である。

活動中、誰かが「OKですか・・・」に対して、他の隊員皆が「OK、OK、OK・・・」一体、何に対して何がOKなのか、全く不明である。

下命・意志伝達が1番 速報(無線)は2番

災害現場の危機の切迫した状況では、無線による早期の状況速報や応援要請も必要であるが、危機に対処するための活動内容の下命や、活動方針の周知徹底など、まず、現場における活動が第1である。

肝心な場面で、自隊に対する無線呼び出しに気が取られてはいけない。

暗黙の了解は「了解」にあらず

災害現場で、「こんなことは、指示しなくても分かっているだろう」という**思い込みは禁物**である。相手が理解していなかったり、気付いていなかったりすると、取り返しのつかない問題に発展してしまう。

相手から返事があるまで確認しあうことが必要であるが、意志疎通の方法は声だけとは限らない。

ヘルメットや肩をたたく、身振り手振りのサインなど、あらゆる手段を使って相互の意志疎通を図っておくことが大切である。

「アイコンタクト」・・ 気持ちに通じあった者同志には有効であるかも・・

現場での即断がベスト判断

現場では、時間を掛け論議を尽くして最良を探っている余裕はない。時期を失しては、最良も最悪に変わる。時間を掛けたベストより、瞬間のベターを積み重ねたほうが良い。

熟慮より即断、現場は待ってくれない。

指示・伝達事項 必ず両側通行

災害現場において、指揮者が伝えた指示を隊員が把握していなければ、現場活動にそごが生じるばかりか、隊員への危険を招くことにもなる。

指揮命令は、相手(隊員)が把握したかどうかを確認して初めて成立するものである。

このようなことから、指示内容を隊員に復唱させるのがよい。

無線は一息ついて ゆっくりと

災害現場では、焦りや息切れがあり、最先着ならなおさらである。

そんな時の無線はついついハンドセットを口に近づけすぎたり、怒鳴るようにして声を出して無線送信してしまうことがある。これでは、正確に情報通信が出来ない。

そんなときは、ハンドセットを20センチ位離して発信するとよい。また、焦りから送信の頭切れが多い。プレストークを押して、一呼吸おいてから話すくらいの気持ちを持つことが大切である。

やり直しより、確実な1回を。

大きな声が聞こえる訳ではない。

隊員が無事帰隊してこそ活動完了

どんな災害現場でも隊員に怪我をさせてはいけない。特に現場経験の浅い隊員にはベテラン隊員と共に行動させ、一人にはさせてはいけない。

怪我させては、どんな立派な活動しても水の泡である。

全員無事帰署！ これこそ災害出動の基本である。

火災時の被災家族の居場所

被災家族が消防隊に詰め寄ってくることは、殆どない。

現場から少し離れた場所（人混みから外れた場所）で、裸足の人・頭を垂れて座っている人・冬なのに薄着の人等、**通常考えられない格好の人が居ないか目を配る**ことも必要である。

現場における時間確認とメモの重要性

各種災害現場においての目撃事項や指示命令の時間は、自らの活動や事後処理に重要であることは言うまでもない。しかし、それだけではなく、裁判など後の最も信憑性のある証拠として必要であることを認識しておかないといけない。特に、常に正確な時計で目撃や下命時間を**メモする癖**をつけておくこと。

消防用語の使い分け

現場指揮者だけではないが、拡声器等を使用しての、指揮や広報活動の中で第三者には、「消防用語」を誤って受け止められることがある。

たとえば、「鎮圧」を「鎮火」と同じ意味でとられたり、内部に進入消火中に外部からの放水を中止させると、第三者は燃えているのに「なぜ」と感じられたりする。

現場での言葉には責任と先読みの出来る判断力が必要である。

災害対応 .. 隊員

かけてあるはしごは取るな 単にあるから使うではダメ

消防隊のはしごと、救助隊のはしご、同じはしごでもそれぞれに活用目的が違う。

はしごは、登るときに架ていする。登る必要のある時にかける。登る必要も用もないのにかけて放っておくと大変危険である。

架ていしてあるはしごを取るのは進入隊員の退路をなくすことになる。もっと危険である。

勝手に取ってはいけない。

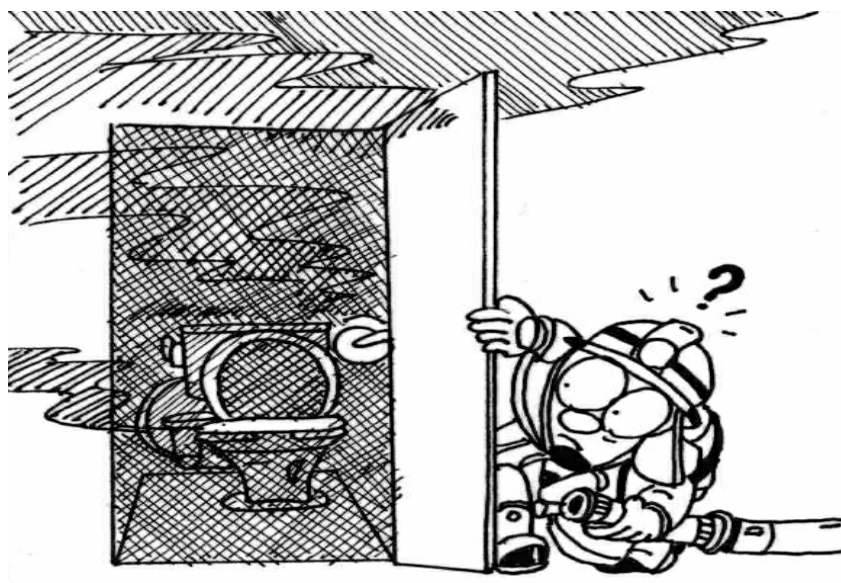
人命検索は全て開けて確認を..

要救助者はどこで倒れているか分からない。

閉まっている扉（便所、洗面、個室 etc）は、**必ず開けて確認**をする。

出来れば、確認済みの印をしておけば、二重の活動を防止出来る。

戸の裏はどうなっているのか目視する。押入の中など通常は考えられない場所でも、要救助者が逃げ込んでいる可能性がある。



玄関だけが入り口と思うな

玄関が施錠されていても、裏口や2階の窓などは開いている場合がある。慌ててむやみに破壊しないこと。まずは可能性のすべての確認が大切である。

消防活動においては、**入り口は全ての開口部**であることを忘れてはならない。まずは、**現場の一巡で確認**すること。

圧力が上がらない原因 … ホースラインにも

路地のホースラインや遠距離送水では、ホースラインの途中で障害が発生していても分かりにくい。

また、伝令は無線によるものが主であることから、放水圧力が上がらない場合は、ポンプ運用以外にもホースラインを確認してみる必要がある。

特に、ホースの屈折は圧力の極端な低下をまねく。

ガラス窓の破壊 次に関放・取り外し

ガラス戸やガラス窓を破壊して進入したり、ホースを通したりする場合は、**周囲の枠にガラスを残すことなくすべて取り除く。**

進入するときに枠から外れて落下したり、引っ掛けてケガをする危険性が高い。また、通したホースに圧力がかけられ、残ったガラス片でホースが破裂する可能性がある。

破壊の後は、『窓を開放する』または、『窓枠ごと外してしまう』ことを考慮する。

また、落下により下方の隊員が負傷する危険があることも忘れてはならない。周囲への配慮を怠ることのないように。

瓦屋根での注意点

瓦屋根は、トタンやカラーベストに比べ頑丈であるという先入観から、注意は滑り防止や放水圧力による転落防止のみになりがちであるが、古家であったり、雨漏りをしている場合は、部分的に腐食していたり、軒先の強度が低下していたりすることがある。

また、瓦の合わせ目に乗ると容易に割れることがある。

こうした場合は、単なる踏み抜きだけでとどまらず、墜落してしまう危険がある。

『三点支持』、『端に乗らない』、『一ヶ所にかたまらない』、『柔らかい・ヘコミが大きい箇所は避けて通る』などの注意が必要。

湖南消防組合の頃、先輩が屋根から転落し負傷するという事故があった。現場での事故は多くの仲間に迷惑がかかる。

足元、頭上 両方に要注意

救助隊員は、逃げ遅れの検索等において常に下を向いて活動するため、足元は注意するが、上からの落下物などへの注意が散漫になってしまい負傷しやすい。また反対に、消防隊員は、注水などにおいて常に上を向いて活動しているために比較的上からの落下物などには注意するが、足元は注意が散漫になってしまい負傷しやすい。

必ずしも、そうではないかもしれないが、注意深くそんな事も考えて事故防止を図る必要があるということである。



竹藪の火災での注意

竹藪に進入する時は必ず**ゴーグルを装着**すること。

竹の枝で目を突くことがある。

安全管理の第1歩である。



現場広報は市民にアピールする好機

市民は、火災現場の情報を欲しがっている。

「鎮火しました。」や「ケガ人はありませんでした。」などの**情報は、時機を失することなく提供すべき**である。消防署名を添えることを忘れずに。

また、機関員も機会を見て現場の状況などを少し考慮して広報とすると、奮い立っている近隣住民も落ち着いたりすることもある。

感電に要注意

火災現場で消火に気を取られるため、露出している配線に接触したら感電する可能性がある。

持つな、触れるな！ **目に見えないものこそ要注意**

電灯・使用メーター・ブレーカーの確認、配線からのスパークはないか・・・

火災現場では、特に自分自身も濡れているケースが多く感電しやすい。

かつて、隊員が火災現場で感電し、救急車で搬送されるということがあった。

分岐管使用は、状況により

ホース3本以内の直近部署の場合なら、分岐管の使用など考えずに並列にホース2本を延長した方が早く放水が出来る。

状況に応じた臨機な活動を・・

災害対応 … 機関員

危険と思えば 自分で確認せよ

車両誘導員の言葉は100パーセントではない。

「高さ3m」標示のトンネルでも、アスファルトの工事で路面が上がっており、2m80cmしかないかも・・・

誘導や標示を全て疑ったら運転出来ないが、最終的な責任は機関員である運転者にある。

危ないと思ったら、迷わず自分の目で確認した方がよい。

サイレン、相手には聞こえていないと思え

最近の車は、サイレント効果がよく、エアコンが標準装備されるようになったことから、窓は閉め切りが多く、カーステレオなどで消防車のサイレンが聞こえにくくなっている。

サイレンを鳴らしていても、相手は分かっていると認識した運転をした方がよい。

また、マイクでの拡声は、「はっきり」「誰にでも分かる言葉」を心掛けよ。

緊急走行の消防車

緊急走行中の消防車であっても、平気で普通走行の一般車両に追い抜かれたりする。

緊急車は、サイレンを鳴らし、回転灯を回して走行している。緊急車としての意味がない走行はいかなるものか・・・

〇〇〇事業所の火災での火災

国道1号線で先行タンク車を後続タンク車が追い越したということがあった。

(某消防長は実行されたそう・・・)

焦る心 .. 常に安全確認

「炎上火災」や「逃げ遅れあり」という情報があるときは、全員が慌てがちになるものである。こんな時は、より一層の安全確認が必要である。

また、水利部署位置に近づくと、全員が水利を気にしてしまうことがあり。気持ちは分かるが、こんなときこそ、周囲の安全、交通事故に気をつけなければならない。

水利部署しない消防車の配慮

水利部署を必要としない車であっても、消火栓や防火水槽の位置をしっかりと把握し、離れた位置に停車するなど、**他の隊の邪魔をすることがあってはならない。**

停車位置一つでも、自隊の活動だけに気を取られず、現場活動全体を想定した部署位置の配慮が大切である。

吸管投入は完全に

防火水槽に部署して、間もなく水が出なくなったときは、ポンプの不具合や機関運用のまずきの他に、**しっかりと吸管が防火水槽の底のピットまで投入**されているか確認をすること。

しっかりと投入しても、誰かが慌てて吸管を引っかけて、底までついていなかったりすることがある。

仮に、初動で完璧な体制が整えられなかった場合には、先のみに気を取られず、一息ついて次の手としてしっかりと体制を整えること。

また、マンホールへの転落防止対策を忘れないこと。

車両部署位置の配慮

狭い道路の消火栓に部署する場合、車両の横にホースカーが通れるくらい、救助隊が三連ばしごを搬送できるくらいの**余地を空ける配慮**が必要である。
活動は、各隊の連携により成り立つものである。

河川への水利部署

河川に水利部署する際、**蛇籠を上流に向け**、自然の流れを利用して効率よく給水することが大切である。

また、水深(水量)が足りなければ、単ばしごや防水シート、消火薬剤容器等を活用して堰をつくり水量確保を図ること。

シートで防げ 土砂の流入

自然水利などで底が泥や砂地の場合、これを吸管で給水すると泥や砂を吸い込んでしまい、吸水不能や、ポンプの破損につながることになる。

こんな時は、蛇籠の下に防水シートを敷くと防止することができる。

消防団の例であるが、ポンプ操法大会で、ポンプに異物が混入していた(原因は不明)ことから、揚水出来ずに大変悔しい結果となった。

現場で発生したらもっと大変である。

新しいホースはポンプ側で使え

新しいホースと古いホース。当然新しいものが性能がよい。

ホースの使い分けでは、放水時の水圧はポンプに近いほど高いため、**ポンプ側では新しいホースの使用**を心掛ける。

したがって、ホースカーにセッティングするときには、ゴムホースや古いホースから順に入れていき、新しいホースは後のほうに入れる。

エンジン始動は運転席で

当然のことではあるが、**エンジン始動は必ず運転席に座ってから**実施すること。

中には、個々のクセで、ミッションを入れたままエンジン停止させる者もいる。

慌てずに、基本動作を徹底すること。

- ・ミッション車ならば、クラッチ、ブレーキペダルを踏んでから。
- ・オートマチック車ならば、P位置を確認しブレーキを踏んでから。

吸管の長さと吸水可能落差について

吸管10メートルの長さ、2本つないで吸水できなくても、**吸管を揺さぶって**吸水を誘導すれば送水に導ける。

〇〇〇事業所での火災

進入路橋上で水利部署したが、あと1～2メートル吸水してこない(落差ありすぎ、吸管2本接続)

そこで、吸管を揺さぶり無事吸水できた(少し、時間はかかったが・・・)

○ 理屈を知れ・・・トリチェリの真空

吸水の高さは理論上、10.33メートルであるが、実際の吸水高さは7メートルである。(水温、水質によっても異なる)

歯止めの跳ね飛ばし防止

外した車輪止めは、**車両から十分離して**おかないと後輪で踏んだり、飛ばしてしまうことがある。

特に、複数隊の同時出動の際に他隊が跳ね飛ばすこともあるので、慌てず支障のない所に置くこと。

また、歯止めは右前輪と思いがち、助手席側も要注意！



公園内の防火水槽

日常、地水利調査に回っていれば、分かりにくい蓋など特徴あるものは覚えているものであるが・・

特に、公園内の砂地に設置されている防火水槽は、蓋が砂などに埋まり位置が分かりにくいものも多く、また、砂がかみ開きにくい。特に夜間は、分からないことが多い。また、夏場は雑草が生い茂り見逃すこともある。

そんなときは、小さい穴や僅かな盛り上がりなどを探すと見つけやすい。

ディーゼル車の減速の仕方

消防車両の走行に際しては、必ずロー発進を励行し、回転数を上げすぎないでギアチェンジを行うこと。

また、ディーゼル車ではエンジンブレーキを使用すると、回転数が上がりすぎエンジンを傷める原因となる。

排気ブレーキを活用した減速に心がけること。

帰隊するまで気を抜くな

活動が終了し、資機材を撤収して現場を引き上げる際、固定ベルト等で固定するか、車内に収納するなど、特に**落下防止に注意**すること。

また、全員で再度資機材を確認し、他の隊に貸し出した資機材が返却されたかなど確認してから現場を引き上げる。

防火水槽に部署、必ず導水管の有無確認を

管内の防火水槽には、大半が導水管（給水管）が設置されている。従って、吸水をすると当然、水槽の水は減水する。その時、**吸水活動しながら導水管を使用して、補給**することが大切である。

消火活動を終了し、改めて補給するとなると、水道水が濁ることは極めて大である。消火活動と同時に行えば、例え濁っても誰も文句や苦情はないであろう。

まずは、防火水槽の5 m以内に、導水管の有無を確認すること。もし、導水管があれば開閉キーを使用して給水すること。

なお、導水管を開く場合は、消火栓（時計回りと反対方向で開ける。）とは逆であることも知っておく必要がある。

時計回りと同方向で開けること。

導水管の他に、ボールタップ方式（自動給水）がある。

機関員 必ず走行経路の確認を

出動前に現場確認を機関員に聞き取り、その経路を確認する。

機関員に一任してもよいが、安全な道路を選んで、最短距離を走行しない場合がある。また、方向違いに走り出すことも考えられる。ややもすると、走行中に現場がわからないから教えてくださいと言う者もいる。

隊長は、必ず事前の確認を。



停止車両に要注意

停止車両の側を通過するときは要注意すること。

運転手は通常、通過車両に注意してドアを開けるが、運転しない人や子供は考えることなくドアを開ける可能性がある。そのことを頭に置き十分注意して通過すること。

センターラインのない道路で、対向に停車中のタクシーがドアが開き精算中と思われる状況で、タクシーのシャーシー下に影の動きらしきを感じ通過しようとしたとき、ふと以前に受けた道交法研修での事故事例が頭に浮かんだ。子供の飛び出し事故である。私はタクシーと並ぶように一旦停止したところ、トランクより背の低い子供が躊躇することなく目の前を横断した。安堵の一瞬だった。

センターキープ、車間は十分！

消防車両は緊急走行に備え、普通走行中は中央線寄り、停車する時は車間距離を十分とって、いつでも緊急事態に対応できるよう心掛けておかなければならない。

走行時はキープレフトが原則であるが、飛び出し注意と対応のため、センターラインのない道路は中央よりを走行するのがよい。

ドレンバルブの開閉は優しく指先で確実に

閉める時は、優しく指先だけで力を入れないで閉める。また、一度で閉の状態は確信せず、コツンと当たり閉の位置まで回したら、また緩め再度閉める。

これを二・三回実施して同じ位置であることを確認して、閉の状態であることを確信して止める。

空気ボンベのそく止弁とは全く違う。

消防車の凍結防止は重要

ポンプ内の水の溜まりやすい箇所等の構造を理解し、**排水を完全に実施**することが大切である。

まずは各ドレンバルブを開け、ポンプ本体や真空ポンプを15秒程度の空運転して水を振り落とす。

不凍液の注入はその後に。

昭和56年の大寒波において、事業所関係のポンプや配管等で被害がいくつもあったが、消防車もしかり被害があった。化学車の放水砲のボールcockとタンク車の放水銃が凍結により破損した。

これは日頃の点検であまりさわらない位置に設けられているため、おろそかになったため起こったものである。

先着タンク車のタンク水は何時も満タン

タンク車のメリットとして、水利確保までの一時放水に活用するが、**水利確保後には、速やかに満タン**にすることを心掛ける。

これは、一時的トラブルに対応するためのもので、中継送水が途絶えても、再度送水されるまでの息継ぎに使用できる。

水量計の水抜き状態は要注意

水量計の水抜きは凍結防止のため実施することがある。

災害出動時、今日のタンク車は良く走ると思いつつ現着するも、放水はじめて水が出ず。

毎日の点検時に、水量確認をするのが当たり前だが、水量計の水抜き状態であることから目視による確認が出来ない状態で、勝手に満水であるものと思い込み点検を怠ったことが原因である。

使用後の補給を怠った者にも責任はあるが、**使うのは自分自身。**

確実に点検を実施すること。

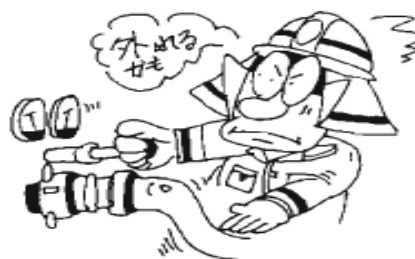
ホースの外れに要注意

ホースの破断で消防団員さんが負傷される事故があった。

機関員は放水中の放口に注意すること。

放口の前で操作する者がいるが、外れることを想定した立ち位置を考えること。高圧で送水しているとき、筒先で急に放水を中止（筒先員はノズル操作は丁寧にする。）すれば反動は放口まで伝わる。不良品があれば外れることもある。

絶対大丈夫は無い。何時も、もしもと言う気持ちで行動すること。



車両誘導は補足的？

車両の誘導は原則であるが、過信すれば事故のもと。

私は2度あった、車両誘導のもとバックするも接触するまでストップなし。
内1回は複数の誘導員が居たのだが・・・

運転するのはあなたです。必ず自分も確認を・・・

踏切に行くか、迂回するか・・・

最近は踏切そのものが少なくなったが、緊急走行時であっても踏切の遮断機につかまれば電車が通過するまでの間、一時停止していなければならない。

現場への到達ルート(迂回コース)を他にも把握しておく必要がある。

金魚のフン走行

同じ消防署から複数隊が出動すれば、数台が金魚のフン走行状態となる場合があるが、無線で連携しながら別ルートを走行すれば、結果的に火点を包囲する形で部署することが出来る。したがって、現場到着時において、数珠繋ぎ部署に終わることがなく、有効な戦術が展開できる。

また、日頃から色んな走行ルートを想定しておくことが大切である。

特に、**直近・最短ルート**は脳裏に焼き付けておくこと。

- ・ 現場で、活動が一段落した際に、車両の入れ替えをしなければならないことがあった。
- ・ 交通渋滞のため、同じ消防署の出動車両全ての到着が遅れてしまった。
- ・ 本部から各署所に出向く際の一般走行で、時に「あれーッ、こんなコース？」助手席で人のハンドル見て気付く・・・

災害対応 … 共通

消防の仲間とは…

大勢の仲間が、同じ釜の飯を食い、一緒に風呂に入り、喧嘩もし、喜びも悲しみも汗と涙を数えきれないほど流している。

ここから固い結束が生まれる。これが消防でなければ、消防とは何だ。

消防の仕事を立派にやり遂げて、卒業された先輩の共通項

誰もが自分のあるべき姿を求めて精進すべきなり、若者は若者らしく、ベテランはベテランらしく。

- ① 明確な目標、ビジョンを持っていた。
- ② 人との出会いを大切にし、長く交際していた。
- ③ 頭の中を常にクリアーに保つことに心掛けていた。
- ④ いつも新しいものを創り出すよう創造的発想を忘れなかった。
- ⑤ 失敗やトラブルがあっても悩まず、次の飛躍の糧としてきた。
- ⑥ 積極的に自分自身を励まし、他人に対しても励ましあってきた。
- ⑦ 他人の知識や技術、能力をうまく活用してきた。

特に変わった点はないのですが、尊敬する先輩諸氏はこれらを実践しておられた。

要救助者 … 要救ではない

消防活動中の要救助者への配慮は当然のことである。意識が有る、無いに関係なくである。当然、呼び方も略すことはいけない。

要救助者 ○

要救(ようきゅう) ×

中国四川省でのIRT活動では、御遺体に対する救助隊の配慮に絶賛の声があがった。日本のレスキューに世界中が注目している。

プロの消防として

ベテランの消防士といえども日常業務の中で、ある瞬間に出動指令がかかるとドキッとするものである。

現場活動のプロとしては、たとえ「事務を doing いても」、「食事中でも」、「トイレの中でも」常に最も迅速に出動出来る体勢を確保しておかなければならない。

「今、災害が起こったら」と常に考えておく。出動に対する備えや意識を片時も忘れてはならない。

部下もそんな姿を見ている。

仮眠するときは、今夜かも知れない・・・と思いつつ。

よく無線で聞く、「相懸かり」とは・・・

火災出動時に、指揮者(中隊長)がよく、タンク車〇〇号は火点直近の防火水槽に部署し、タンク車△△号は相懸かりにて活動せよ・・・！

これは、単に、一つの活動の取り決めでも何でもなく、「筒先口数多数による早期包囲体制の確立」や、「遠距離ホース延長等による隊員の体力消耗軽減」また、「消防隊の効率的運用」など、これらを図ってゆくための戦術の総称である。

安全管理意識

消防隊員として、**事故や二次災害を発生させない、自分自身や仲間に怪我をさせない**ためには、**安全意識を身につける**ことが重要である。

現場到着して直ぐに、何か変だぞ・・・と空気を読む力や感受性を養うこと、本当にこれでいいのか・・・など、常に問題抽出意識の育成が大切である。

現場で、安全を探すな(安全などない)・・・ **危険に優先順位をつける**

また、目先の事態に左右されず、先を予測した行動力を身につけることで余裕が生まれ、臨機応変で効果的な活動によって突発的な事態対処が可能となる。



災害対応は「119番通報」から始まる

市民の助けの求めの第1歩は、119番通報から始まる。

119番受信した指令員の貴方が最先着隊の小隊長であることを強く認識する必要がある。

質の高い訓練

質の高い訓練は、量(時間)の上にしか成り立たない。

多くの疑似体験や訓練でどれだけ現場イメージが出来るか・・・これにより訓練効果は全く違ってくる。

『これは訓練であるという意識しかない訓練は、訓練に相当しない、訓練にあらず』

災害は、忘れるからやってくる

その災害、事故を覚えているのはその当時者と、一生懸命書類作成した者だけではないか。**時間がたてば忘れるという「平和ボケ」**

その時の災害をいつまでも忘れるな

覚えていることで、イメージする力が養われる。もっと教訓を生かせ。

NBCや警戒区域でのゾーニング

ゾーニングに定義はない。

測定値も大切であるが、何より**環境や周辺異変と五感が大切**である。

ゾーニングは現場を守るために死守すること。

アメリカでは、ゾーニングを破ろうとする者は、銃を向けられる。それほど、重要である。

目標は、完全なる社会復帰

外傷の病態に対する理解が不可欠であり、的確な観察なくして的確な救助なし。

- ゴールデンアワー（防ぎ得た死を無くすために60分以内に根治的治療を）
- プラチナの10分（ゴールデンアワーの最初の10分が最も大切）

河川で水流が白濁している箇所は浮力がない

河川で**水流が白濁している箇所の浮力は半分以下**で、通常のライフジャケットでは浮かないことを知っておく必要がある。

急流救助用のジャケットは通常の物より浮力が数段違う。

一般の水難救助対応と、河川等での急流救助対応とは全く違う性質のものであることを知っておく必要がある。



道路冠水による車両水没・・・ドアは開かない

冠水した道路に進入してしまった場合、落ち着いて直ちに停車して窓を開け、窓から水位を確認してドアの下辺りか、タイヤの半分くらいまで浸水していたら、エンジンが動いている間に引き返すこと。

タイヤが隠れたら、ドアが開かなくなる危険水位である。

「もしや」に備える

指令内容や出動途上の無線内容から怪煙などを勝手な先入観で小火と判断すると、炎上火災の場合取り返しのつかない事態を招くことになる。

災害現場へ出動するときは先入観を捨て、**目先に炎上火災がなくても、水利部署、ホース延長などを確実に**行うこと。

もしやに備えることが大切である。



思い込み、聞き間違いは失敗の始まり

現場活動を行う上で、事前の情報は非常に有効である反面、その情報をうのみにし、思い込みで活動することは危険であり、思わぬ失敗をすることとなる。

情報は確認して初めて意味のあるものとなる。疑うことも忘れてはいけない。

- ・ 空家の火災であっても中に人がいないとは限らない。
- ・ 「子供が家の中にいる」の情報でも、小さな子供とは限らない。親にとって子供は何歳でも子供である。
- ・ 「〇〇ちゃんを助けて～」一步踏み込めば、ワンちゃんと判明。確かにその人にとってみればかけがえのない存在かも知れないが、情報は確実に確かむことが大切である。

火災現場での近隣者に要注意

火災現場での近隣者は重要な情報源になる反面、建物に逃げ遅れがいたりするときなどは極度に興奮していることが多い。

「早く助けて」と怒鳴ったり、活動の障害になったりと、こちらがよほど冷静に対処しないと、いつまでもこの人の対応に終始してしまうことになる。

「みんな逃げた」は、我が家だけ

火災現場では、火元の家人はもちろんのこと、近隣者も気が動転していたり、興奮していることがほとんどである。自分の家や家族を思う気持ちが強く働くのであろう。「逃げ遅れた人は？」と質問しても、答えは自分の家のことだけとなるのは当然である。

建物、世帯別等、確実に情報を取ることが重要である。

また、家族は学校や仕事に行っているとの申し述べがあっても、本人を必ず確認すること。全て消防が行うのではなく、警察に依頼することも手段である。

活動検証はホットなうちに

現場活動後に、活動検証や議論の場を設けるのは指揮者の責務である。所属（部や小隊）としての戦術を確立するためには、**帰隊後のホットな題材についての検証は欠かせない**。また、検証結果を踏まえた訓練計画をし、次に生かすことでレベルの向上を目指すことが大切である。

意志疎通の早道でもある。

AVMは使うもの・・・過信注意

AVMにより、自車位置、他車位置、地水利情報など多くの情報があり便利であるが、あくまでも目安に過ぎない。

コンピューターができることは最大限に活用すればよいが、情報に惑わされて使われているようではいけない。

ツールはあくまでツール、特に、地水利などは事前の調査に勝るものはない。

車庫はきれいに

車庫入れをする前には、車庫内をよく見て確認すること。

きれいな車庫であれば、油漏れ、ビスなどの落下にもすぐ気が付く。**日ごろから車庫をきれいに**し、車両故障の早期発見場所とする。

屋内進入は退路を確保して

来た経路を必ず戻れるほど単純なものではない。特に、屋内進入時は、必ず自分の退路を確保してから行う。むやみに突っ込むと、退路を断たれて慌てることになる。

自己確保ロープ、東消投光器ケーブル、ホースをたどる、壁伝いに出る等、いつも**退避を念頭に！**

自火報の発報 あなどるな

119番の受信状況などから勝手に、「誤作動だろう」などと勝手に判断してはいけない。

消防隊が、本当に発報事故（誤作動）であると確認するまでは、**常に最悪の事態を想定しておくこと。**

当然のことながら、水利部署して放水のできる体制を取っておかなければならない。それが無駄に終わったとしても、緊張感を持って行った一連の活動は、必ず次の現場活動に生きてくるものである。万一燃焼していた場合は、速やかに消火活動に移ることができる。

また、緩慢な現場での活動は市民の目によくつく。



もくじ 木2建物 屋内進入

木造2階立ての建物での屋内進入では、大量放水により畳み等が多くの水を吸収して大変重くなっている。さらに焼け細った梁ではいつ崩落しても不思議でない。

安易に進入してはならないし、必ず、警戒員を配置する必要がある。

(京都市消防局、神戸市消防局では、隊員が受傷・殉職している)

資機材は出来るだけ前へ前へ..

現場活動の中で、「あれを持ってこい・これを持ってこい」というケースがよくあるが、その度に車両まで取りに戻ってはいは活動にならない。

必要かと思ったものは全て、持っていったほうが後々の活動がスムーズに行く。

特に日常的に**使用頻度の高いものは迷わず現場まで持って行く。**

前へ前へ..

現場では 丁寧な言葉を心掛けよ..

混乱した現場で、要救助者の表情、声などで自分が興奮し同調してしまったりは、冷静な判断ができない。特に情報収集時などでは、必要な情報を聞き出せなくなる。

こういった場面では、相手を落ち着かせるとともに自分自身を落ち着かせるためにも、**努めて丁寧な言葉を使う。**こちらが丁寧に話すと相手も落ち着いて話してくれる。

いつも、相手の身になって。

小網の用途 使い方色々

わずか、4メートルのナイロンロープではあるが、これが実に役に立つ。

『ホースの確保』、『身体の確保』、『はしごの確保』、『背負い搬送』、『吊下げ』、『吊上げ』等々、小網は時として、力強い味方となる。

要は、「**どれだけの活用法を知っているか**」、「**いかに臨機に使えるか**」、そして「**現場に持って行っているか**」がカギである。

きっと役に立つ。

だからこそ大切に扱い管理すること。

一度緩んだ二重巻ホース

一度緩んでしまった二重巻きホースを締め直すのに、再び最初からまき直す必要はない。

1. 緩んだホースを地面に置く。
2. 左膝（右膝）でホース中心部を押さえる。
3. 右手（左手）で受け金具の締め付け部を持つ。
4. 右手（左手）で手前に引きつつ左右にホースを叩いて締め付ける。



メモは意識して取れ .. 次第に習慣となる

現場活動に限らず、日常業務において注意を受けたことや感じたこと、反省したことなどは、その日のうちにすぐにメモする。

どのような場面で、自分がどのように考え、感じたかなどをできるだけ詳しく記録する。

自分に都合の悪いことは忘れたいものだが、あえてメモって行動を客観的に見直し、反省することで活動レベルは確実に上がっていく。

メモは、最初は意識することで、次第に習慣となる。

誰に見せるものでもないの、自分が分かればそれでよいので、きれいにまとめようとしなくてよい。できるだけ正直に書くことが大切。

相手は被災者 .. 相手の身になった聞き方を

自分がその情報をつかもうとするあまり、自分の任務だけを考えて相手方に配慮しない質問の仕方をしていると、市民の負担になるばかりか部隊の活動としても好ましくない。

特に、個々の隊がバラバラに情報を取らずに、情報担当隊（者）を決めるなどして、**情報をまとめてみんなで共有**する。

また、先着隊以外の隊員が質問するときは、「同じことを聞かれたかもしれません。」などと前置きをして、まず相手の理解を得ないと怒らせてしまうことになる。

相手は被災者である場合が多いので・・。



出勤時も3点支持

自身の身の確保の原則は、3点支持である。

緊急走行時は、両手で固定物を握ることが基本であるが、地図の確認やメモなどを行うときでも、せめて**片手は車内の固定物**を握り急ブレーキなどに備えておく。

昼間も携行 照明器具

災害現場は、昼間でも明るい場所ばかりではない。また、検索にも備えて**照明器具は必ず携行**すること。

個人装備の必需品として。

空家にも人がいると疑え

勝手な先入観は拭い去る必要がある。

空家や空室でも、火災が発生するには何らかの形で人が介在している可能性がある。

何かの事情で帰ってきたり、空家に誰かが忍び込んだりしていることも考えられる。空家や空室だから人はいないと安易に考えず、**どのような状況下であっても逃げ遅れの確認**は徹底しなければならない。



ガス漏れ現場 微小火源に注意

ガス漏れ事故の現場では、微小火源で爆発する危険性が高い。

真っ暗な室内の検索時、不用意に壁に手をあてると、電灯のスイッチがあったりして思わぬ事態になることがある。電灯スイッチは、入室してすぐ手の届く位置に設置してあるので注意が必要である。

使用資機材は防爆タイプであるかどうかも日常的に知っておかなければならない。

絶対に踏むな ホース

ホースを踏んで、危険な目に遭うことがある。

水の通ったホースは、重く扱いにくいだけでなく、『丸い』、『固い』。また破裂の恐れも十分にある。

普段から、水が入っていないホースも踏まない癖をつける。

壁の間まで確認 … 風呂の空焚き

風呂の空焚き（外焚き式）は、浴槽や循環パイプの燃焼は止まっているも、モルタル壁の間に残火があることが多く、確実な残火確認が必要である。

熱画像直視装置の活用と**必要な破壊は、ためらってはいけない**。

過去に、再燃により出動したケースがある。

鎮火後の建物で、少しでも煙があがっていれば市民は通報される。

モルタルは ヒビと膨らみに要注意

火災調査時などの注意として、熱を帯びたモルタル壁に、亀裂、膨らみが生じたら、落下するおそれがある。

周囲に、立入禁止テープやロープを設置するなど、活動中の全隊員、関係者に周知する。

モルタルが熱を受けると、受けた反対側が膨らみ亀裂が生じて強度が著しく低下する。



『愛称』・『笑顔』 災害現場では控えよ

日常、親しみを込めて愛称で呼ぶのは構わないが、第3者の前や、特に、災害現場で愛称で呼び合うことは、真剣みがなく不謹慎に思えるとともに、災害が終息してホッとしたときに思わず出してしまう笑顔も、り災者からすれば、『無神経』に見られても仕方ない。

帰隊するまで、気を抜いてはならない。

はしごで渡れ ・・ 過重分散

トタン屋根などは、大人の体重に耐える強度がなかったり、古くなれば尚更である。登らないのが原則であるが、やむを得ず登る必要があるときは、はしごを渡して**過重分散で足場を作れ**。



あらゆる所に危険が潜む

人はどうしても、皆が見ている方向を同じように見てしまいがちになる。そんなときには、誰か一人でも反対方向を気遣うことで危険を発見し、部隊を救うことになる。

災害現場には、思いもよらぬ危険が潜んでいるので、他の者が右側を見ていたら、自分は左側を見る。他の者が上ばかり見ていたら、自分は下を見る。また、適切な活動を行うためのヒントを発見するかもしれない。現場には、危険がいっぱいである。



慌てると急ぐは違う

現場活動においては、『慌てる』と異常に興奮し極度の緊張状態となり、視野が狭くなって身の回りの危険が見えなくなる。また、思いどおりの活動や普段訓練でできていることができなかったりする。

一方『急ぐ』は、平常心と適度な緊張状態を保ちつつ、やるべきこと、操作をしっかりと見据えて迅速に行うことである。迅速であることが条件の現場活動において、慌てず、しかし迅速に活動するために、いかに自分をコントロールするか。その手法は人それぞれだが我々に課せられた課題でもある。

『慌てる』と『急ぐ』は根本的に異なる。

五感のフル活用

『炎の色を見る』『あらゆる音、危険の前兆音などを聞く』『ガスやその他の臭気を嗅ぐ』『熱気を感じる』など、**五感をフル活用し現場に対処**せよ。

ただし、『何の色か?』『何の臭いか?』『何が危険か?』『何のサインか?』などを感じるのは、事前の勉強と経験、普段からの研ぎ澄ました感覚である。

『あいまい』を残すな

いろいろな『あいまい』が現場活動の中に存在する。

特に、現場情報は多くのあいまいが飛び交い、何が正しいか判断に困ることがある。「要救助者情報」、「年齢・性別」など、数え挙げればきりが無い。

少しでも『どうだったかな』と思ったら、**必ず確証を取り、不安要素を取り除く**ことが大切である。

後で悔いが残らないように！

ロープは踏むな！

ロープを踏んで腕立て伏せをした人は沢山いるのでは・・・

何故ロープを踏む行為が罰を受けるのか？

ロープを踏むことにより、細かい砂等がロープの内部に入り、ロープ内部で素線切れを起こし、**ロープの強度が無くなる。**

ロープ外部の毛羽たちや磨耗で使用の可否は判断できるが、内部での素線切れは確認することができず、重大な事故に繋がる。

また、ワイヤーロープも同様である。砂の上で使用する場合や後始末の時は、シート等を敷き、砂の流入を防ぐ対策を忘れずに。

あらゆる専門家の力を借りて・・・

現場にはその道の専門家、すなわちプロがいる。

消防の知識だけでは不十分なときでも、こうした専門家の知識や技術をうまく活用することにより、活動は効率的になる。災害防御という大目的のために**専門家のノウハウ**をいかに引き出し、組み合わせて活用するか、これもプロの消防の真価である。

迷わず、直ぐに協力を求めよ。

- 湖南防火保安協会支援協力事業所との連携

防火衣完全着装から始まる 安全管理

防火衣着装から、すでに災害現場活動は始まっている。

出勤指令で**防火衣を素早く確実に着装**することが、安全管理の第一歩であり、それが隊活動全体の安全管理につながっていく。

素早く確実に着装するには、訓練や工夫が必要である。

早く乗り込もうとして中途半端な着装ではダメである。

柔軟対応 … 基本があつてこそ

災害対応や器具の取扱いなど、基本操作を確実に実施できない、あるいは知らない隊や隊員に、災害現場において柔軟で臨機な活動ができるはずがない。

臨機応変な活動をするには、元になる知識、技術、つまり基本が必要である。

基本が分かってこそ、その組み合わせによって応用が生まれる。

うかつに歩くな、建物内部

火災の後期や、原因調査時などで建物内の燃えている部屋や廊下等を歩くときは、隅を通ること。

中央部は焼け抜けやすいので注意すること。



身の安定化 … 高所注意

足を前後に開くか、腹ばいになり、重心を低く、後方にとることが重要である。
自己確保が取れないとき、人手があれば、必ず確保してもらうこと。

危険側に平行に足を開くな。

高所では低姿勢を徹底せよ。



先手作戦 次を読み

災害現場の様相を確認し、推移を含めて予測、**先を読むことは次ぎの戦略を練るのに大変重要**である。

刻々と変化する災害現場で、単純に現状だけを見ていたのでは、すべての作戦や活動は後手に回ることになる。

二重巻きホース 一人操作法

収納時や人数不足の際、一人で二重巻きホースを作ることができる。

- ① ホースを二つ折にし、金具部をそろえる。
- ② ホースの二つ折り部を約60cm折り返す。
- ③ 内側になったホースから巻き始める。
- ④ ホースを重ねずにそのまま巻き取る。



隊単位は活動の原則

現場活動において、違う隊から他の活動や伝令などを頼まれることがあるが、活動は隊単位であることを忘れてはいけない。

緊急時を除き隊中心の活動を心掛け、**常に3分の1または4分の1の存在**であることを認識し、自隊の指揮者の下で活動すると。

再装備まで気を抜くな

現場活動終了後は皆が疲れているので、特に事故防止に努めるとともに、帰隊して再装備（ホース積載、ボンベ交換等）が完了するまでは、出動（活動）中であるという意識を持つ。

心身共に疲れきった状態では集中力が低下しているため、事故が起こりやすい状況にあるので、決して気を抜いてはいけない。

決断は迅速に・・

『決断は迅速に』、『判断したことは、即座に思い切って』やることが原則であり、中途半端は禁物である。

また、「やろうか、やめようか。」迷っているうちに、事態は取り返しのつかない方向に進んでしまうことがある。

当然のことながら、現場で判断を誤らないよう、日頃から知識、技術を身に付けておくことが大切である。

災害現場は他人の家

いくら災害現場といえども、そこは他人の家である。

土足で活動する必要のあるときなどは、早急に屋内に防水シートを敷くなどの配慮をすること。

緊急時以外は、屋内では可能な限り靴を脱ぐこと。

不必要な汚損を防ぐ配慮をすること。（目的は被害の軽減なのに・・）

穴はのぞくな

酸欠事故現場に限らず、素面で穴をのぞくと、酸欠空気を吸い込む危険がある。

絶対にするな！

屋根からの放水 ホースラインは棟越しに大きく取れ！

屋根からの放水は危険であるが、ホースラインの工夫で少しは軽減できる。

ホースラインを棟越しに数回蛇行させ、棟瓦をまたいで棟瓦に腰掛けて放水することにより、高所での安全は確保できる。



車両メンテ 目的は清掃と器具点検

表面的に美しく手入れするだけが、車両手入れではない。
器具などの機能点検や使い方の習熟も、車両手入れの大きな意義である。
時にはワックスを掛けるなどの表面的なものになってしまいがちであるが、
見えない場所や日ごろ使わない器具こそ、定期の手入時にしっかりと点検しておく必要がある。

例えワックス掛けであっても積載場所の確認やネジの緩み、紛失などを発見できるものである。

昔は、「真ちゅう磨き」で鍛えられた。

身のこなし 基本姿勢から

現場活動において負傷する理由の一つとして、日ごろの訓練で基本動作が身についていないことが掲げられる。

訓練で基本動作を何回も反復し、**頭ではなく体で覚える。**

つまり、身に付けることによって、基本動作の集まりである現場活動の中でスムーズな身のこなしができ、活動の効率化と安全が図れるのである。

ただし、身体能力による個人差は当然あるが・・

訓練 目的意識を強く持つ

訓練での失敗は必ず現場に生きるものであり、失敗を恐れていては効果的な訓練はできない。また、あらゆることをやってみる。考えられる失敗をすべて出してみることも必要であり、失敗の芽を一つずつ潰していった繰り返さないようにすることが訓練の意義である。ただし、同じ失敗を繰り返さないことは言うまでもない。

また、「**見せる訓練**」と「**技術訓練**」をしっかりと切り替えて**目的意識を持つ**こと。

広報的意味合いの濃い見せる訓練では、一糸乱れぬ活動が要求される。

1に确实 次に迅速を

訓練等で技術を習得する場合、多くをマスターしようと最初から速さばかりを求めると、うまく行かないばかりか誤ったものになってしまい、危険も大きい。

初めはゆっくりでいいから、**确实な操作を心掛ける。**

消防救助技術訓練も同様である。

見かけでは分からない軟弱地

開発の造成中の土地では、地盤面は平らでも十分な転圧がされておらず、軟弱であったりするため**安易に車両を乗り入れないこと。**



開発の検査出向時、救助工作車が身動きできなくなる事案があった。

見取り訓練

見取り訓練では、単に活動の流れや方法論を見て、感心しているだけではない。

良いところと悪いところを確認し、「なぜ良いのか」、「なぜ悪いのか」を考え、また、自分なら「どうする、どう判断する」など頭に思い浮かべることが大切である。

このように、**イメージトレーニングを重ねる**ことで、実訓練が見違えるほど変わるものである。

意識することが大切である。

指令書の取り扱い

個人情報が記載されている。

現場で絶対紛失しないように取り扱いに留意すること。

情報漏洩は組織の資質が問われる。

指令書（略）

風の強い日の現場などでよく飛ばしてしまうことがある。

古い建物炎に注意！ 新建材は炎に惑わされるな

老朽木造建物の火災で、炎が強く吹き出ていれば飛火等による延焼拡大になるため、多量の水を確保することが必要である。

一方、新建材を使用している鉄骨建物は、開口部から炎が出て隣接建物に延焼拡大する可能性があるので、迅速な放水が必要である。

建物特徴を素早くつかむ必要がある。

現地調整所の立ち上げは素早く

大規模災害や国民保護対応など、消防以外にも多くの機関が事案対処して行く際、関係機関との連絡・調整等をスムーズにするため、**いち早く**現場指揮所に併設して**現地調整所を設置**することが重要である。

現地調整所の設置には、**大きな看板による明示**が大切であり、関係者、家族、マスコミ等全てがここに集まる。



平成20年7月の志那沖琵琶湖や、平成21年2月の赤野井沖琵琶湖で発生した行方不明者の捜索では、現地調整所の有効性が立証できた。

隊長の指揮が全てではない

特に危険を伴う局面に出くわせた者や早期に気づいた者は誰であろうと皆に知らせる必要がある。

隊長への危険が迫った時に独自判断して指示する者も必要である。

とび口は、足場を調べる命綱

外部から建物内に進入する場合は、とび口等で足場の強度を調べることを忘れてはならない。

慣れたら基本に戻れ！

日頃の慣れは事故へと繋がる。

慣れたら基本に戻ることが大切である。この動作の繰り返しが事故を回避する。

車両ドア 風には注意を

強風時の車のドアには要注意。

突風により急に閉まり、怪我のもととなる。逆に開けば故障（蝶つがいが変形）する恐もある。

開けたら閉める。開けたままなら持っていること。

携帯無線機は、防水でない

携帯無線機は、防水構造でない。スイッチ部から水が浸入し、内部基盤が腐食し、故障に繋がる。

現場では出来るだけ濡らさないように心掛ける必要がある。

帰隊後、カバーを外し乾燥、充電等 十分なメンテナンスを施すこと。



訓練を本番に、本番を訓練に！

炎上火災では日頃いくら訓練を重ねていても熱くなるものであるが、ものの考え方次第で、冷静に判断できる。

そのためには、日頃の訓練の時から、色んな角度から考えて、もしもの想像を広げて判断することが大切である。

現場は「理屈」でなく「経験」が物を言う！

「下手な鉄砲数打ちや当たる」と良く言われる。

独特な環境の災害現場では、**長い経験と広い視野**が重要であり、的を得た対応ができる。

単に、耳年増で知った事を言っても、絵に描いたモチ見ても、これでは結果には導けない。

災害対応 … その他

ロープとザイル

日本の消防では、今日に至るまで使用している撚りロープ(三つ打ちレンジャーロープ)とスタティックロープを比較するため、スタティックロープを「ザイル」と呼ぶ傾向が強い。

しかし、このザイルという言葉は、ドイツ語であり、その意味はロープである。韓国料理にキムチチゲというのがあるが、これをよく「チゲ鍋」と呼ぶ人がいるが、訳すと、「なべ鍋」になってしまう。これと同様に「ザイルロープ」と言うのは、知っている者が聞くと「ロープロープ」となる。

三つ打ちも、スタティックロープも全てロープである。

クリティカル イレブン ミニッツ(きわどい11分)

飛行機事故の発生の9割は、離陸後の3分と着陸前の8分と言われ、この11分間で事故が発生する可能性が非常に高い。

人間の環境の変化への順応期間である。(環境への同調、光への接近など)
静から動へ(待機から出動へ) … 事故に気をつけよ

トイレからの出動は！

まずは、焦らないことが大切であるが、そのために事前に何をするかである。

トイレに入ったら、**すぐ紙を取る。**

いついかなる状況であっても、迅速な出動ができるよう心掛けておかなければならない。トイレの中でも、出動指令は待ってこない。

行きと帰りは違う道

署外業務等で署所外へ出る場合、ただ目的地へ行って帰るだけでなく、その途中は地水利調査であることを常に意識しておくこと。

行きと帰りは、できるだけ違う道を通り、場合によっては車を止めて調査するくらいの気持ちが必要。

いつもと違う逆方向から見ると、意外と新鮮な発見があったりする。

防水シートの四つ折り 一人操作法

災害現場で人手が少ない時や狭い場所等で、一人で簡単に防水シートを折りたたむことができる。

- ① 右手（左手）でシートの一辺の中央部を持つ。
- ② 左手（右手）でシートの中央をつまむ。
- ③ 右手（左手）で対辺の中央部を合わせ持つ。
- ④ 両手を持ち上げシートをさばく。
- ⑤ 持ち上げたシートを順次畳み込む。

①



②



③



④



入浴中の出動指令

トイレからの出動と同じである。焦って、風呂で転倒して怪我をしていては何もならない。

- ・身体を洗っている時に出動指令が鳴ったら、湯船に飛び込み、頭まで潜り、すばやく出る。
- ・風呂での脱衣は、着る順に置いておく。
- ・冬期、重ね着している下着はまとめて脱ぎ、すぐに着られるようにして、カゴへ入れておく。等々…

やり方は、人それぞれだろうが、入浴中の出動に備えて、迅速に着用できる服の脱ぎ方一つにも、工夫しておく必要がある。

何よりも、**風呂でも緊張を解くことは許されない。**

温泉気分でゆっくり入るのは家でよい。

ステップに物を置くな

ついついやってしまうことに、自分のヘルメットや手袋などの装備品を、ステップやバンパーに置いてしまうことがある。

こんなときに出動があったりすると、それらの装備品を置いたことをすっかり忘れて慌ててしまう。

資機材等を車両のステップなどに置くことは避けた方がよい。



電池は消耗品

消防の資機材には、電池を使っているものが多い。

日頃から全種類の予備電池がそろっているか、また、バッテリー式のものは補充電がされているかしっかりと確認をしておくこと。

毎朝の点検できっちりと。

夏の現場対策 水分補給

夏場の訓練や現場活動では水分補給が不可欠であるが、特に、現場では飲料水はなかなか準備できない。

必要な水分（スポーツドリンクを含む）は、自隊や所属であらかじめ用意しておくこと。



意識づけ 1当務 1訓練

日々の業務での意識づけとして・・・どんな訓練でもいいから、**1当務1回は訓練**をする。ただし、**目的や主眼をしっかりと持つこと**。

その積み重ねが大切である。

事前準備で全てが決まる

危機管理組織として、いつ発生するかわからない災害に備えて万全な準備をすることは当然のことであり、準備を怠ることは活動を困難なものとする。

災害現場活動や訓練でも、事前準備（心構えも含めて）で既に8割方勝負がついてしまうと言われ、「**段取り八分**」とよく言われる。

現地踏査 地水利調査に勝るものなし

A V Mや地図はあくまでも災害現場へ行くための情報を得る一つの手段にすぎない。

精度の問題と併せて、これらから入手できる情報には限界があるので、誤差があるものと心得ておく必要がある。

出動指令を聞いただけで現場周辺がイメージでき、水利が分かる隊員が何人いるかで活動は大きく変わる。

イメージできれば出動時点からの全く余裕が違う。

出動から現着までは、日ごろの地味な努力、成果を発揮する一瞬であることは誰もが感ずるところである。

やはり、**現場調査と経験に勝るものはない。**



担当業務は内輪の話

市民にとって消防士は、消防のあらゆる事象に対応できるプロなのだから何でも出来ると思われているに違いない。

「消防隊だから応急手当ができない。」とか、「救助隊と違うから救出できない。」とかは通用しない。

消防のプロとして、最低の知識と技術はマスターしていなければならない。



交通安全五訓 暗唱してこそ 安全訓

交通事故防止のため、交替点検時等で安全訓を朗唱している。

しかし、安全訓掲示板などを見なければ言えないようでは、意味がない。

しっかりと覚えることにより、交通事故防止と消防機械器具取扱いの大切さを知り、事故防止へとつなげるその趣旨を、今一度再認識する必要がある。何よりも意識することである。

交通安全五訓

- 一 法定速度の遵守
- 一 喚呼応答の励行
- 一 車両誘導の励行
- 一 機械取扱の精通と整備管理
- 一 的確な判断と復唱の励行

日々の雑談の中にこそ名言あり

会議や警防検討委員会等で出される意見は、かしこまった内容で、なかなか生きた声が聞きにくい。

一方、日ごろの雑談では、皆が本音で話すため、体験談、要領などの名言が飛び出すことがある。中には自慢となり大げさな内容もあるかもしれないが、雑談の中からよい知識を得られれば財産となる。

雑談には耳を澄まし、盗めるものは黙って盗め。

服装の乱れは 心の乱れ

「これぐらいはいいだろう」という甘えは、災害現場や日常業務でも必ず現われ、重大な結果に繋がることになる。

身だしなみや服装をきちんとしていれば自然と行動も伴ってくるし、市民にも認めて頂ける。

きちんとしてしようとする心構えが大切である。

『**服装の乱れは 心の乱れ**』

勝手な思い込みで失敗する

自分の勝手な思い込みで失敗するケースは多々ある。

一般住宅の庭の池でも、小さいが深いものがある。

大きさや形で判断し、歩いて渡っても大丈夫と思っていると深みにはまることになる。

どのような事でも、**思い込みは失敗のもと**である。小さく深い池はその例えである。



仮眠時 . .

24時間勤務の中で、唯一横になってゆっくりと心と身体を休める時間は仮眠の時であろう。しかし、あくまで、仮眠であり、いつ出動指令が鳴り響くか分からない。その時にそなえ、個々の事前準備もあると思われるが・・

- 靴下は履いたままでいる。
- 靴(スリッパ)は必ず 揃えて脱いでおく。(風呂のときも)

着替えは2着以上持て

24時間勤務中、火災などの災害出動に何件出動するか分からない。
活動服だけでなく、**下着などは2着以上準備**しておく方がよい。

個人の常備薬を持つ

消防職員は24時間を消防署で勤務して過ごす。

自己の体調管理をしっかりするのは当然であり、ちょっとした病気(風邪)には自分に合った薬が良く効く。

常備薬は個人の必需品である。

緊急消防援助隊 個人装備はOKか・・

全国的に、いつどこで大規模地震や自然災害により応援出動しなければならないか分からない。

とっさの出動命令にも慌てることがないように、**72時間自己完結の個人装備を準備**しておくこと。

地震が起きれば車庫から逃げろ

地震の揺れで大型車両がぶつかり合う。
挟まれる危険がある。すぐに逃げろ。

なぜ火事場のバカ力^{ちから}？

昔からよく言われている「火事場のバカ力」
そもそも人間が元々持ち合わせているとされ、究極に追い込まれたり、
わらをもつかむ思いから、普段の限界や極限を越えるとされる。
生きるために、できる「力」 ・ 出る「力」 ・ 出せる「力」

作 成 に か か わ っ た 職 員

警防業務検討委員会委員(平成20年度)

市村利之	加賀爪三代司	津田弘満	今井善昌
岡本勝治	松並修司	大熊哲雄	横江 学
佐野弘一	山本 茂	渡辺 満	北村一博

東消防署

林田穰治	津田弘満	今井善昌
------	------	------

西消防署

林 吉明	山本昌弘	佐山 眞	阪口清隆
岡本勝治			

南消防署

山本 茂	佐野弘一
------	------

北消防署

今井康夫	渡辺 満	北村一博
------	------	------

写 真

北村一博	若代卓三
------	------

イラスト

梅影厚広

消防本部

中野宗城	藤村春男	行村浩一	中島郁夫
今井貴浩			

当消防局は、昭和４５年に広域消防体制整備後、４０年の節目の年を迎えるとともに、湖南４市の人口が３１万人に達し、これに対応するため第９次消防計画に基づいて、消防車両・人員を増強するとともに、平成２１年４月から防災・国民保護に関する業務のうち、夜間・休日等における初動連絡等を消防機関が新たに担うことなどを契機として、消防本部名を改称し、市民に更なる高度な消防サービスを提供しようとするものです。

このような中、現場活動体制の充実を図る目的で機動指揮支援隊の発足、さらには特別救助隊の増隊により現場活動体制を強化するとともに、今後、新たな湖南消防の伝承が寄せられ、本冊子が現場活動経験を補完するものとなるよう願うものである。

